■国際会議レポート

ヨーロッパ・スポーツマネジメント学会 2015 年度大会 The European Association for Sport Management Conference 2015

山口志郎（流通科学大学）

古川拓也（早稲田大学大学院）

1. はじめに

アイルランドの首都であるダブリンは、1000 年を超える歴史と豊かな伝統があり、多く著名な作家や芸術家、音楽家が生まれた町である。こうした歴史ある町で、2015 年 9 月 9 日から 12 日にかけて第 23 回ヨーロッパ・スポーツマネジメント学会（EASM Conference: European Association for Sport Management Conference）が開催された。今大会では、“Sport Management in the Digital Age（デジタル時代におけるスポーツマネジメント）”という全体テーマのもと、ヨーロッパのみならず、東・中央アジア、中東、北米、オセアニアなど、世界各国からスポーツマネジメント関係者が会場であるアビバスタジアム・カンファレンスセンターに集った。日本からの参加者は筆者らを含め計 20 名であり、発表者は、一般発表者 5 名、ポスター発表者 3 名の計 8 名であった。

本レポートでは、まず今回の学会大会の基調講演とセレモニー、研究発表の演題テーマについてまとめ、その中で筆者らが着目した研究分野として、イベント効果研究、スポーツ政策研究、スポーツ参加者研究に焦点を当て、分野別の傾向を考察し、第 23 回 EASM Conference の参加報告とする。

2. 基調講演とセレモニー

今大会の基調講演は、リーズ大学ビジネススクールのビル・ジェラード氏（Bill Gerrard）によるものであった。スポーツマネジメント分野における理論的な理解と実践での取組には乖離が生じていることを問題意識に、スポーツマネジメントの多様性と学術的な課題について論じた。今後は、親学問としての経営学や経済学の分野で行われている研究手法を用いて、スポーツマネジメントの実証的な研究に取り組むことの重要性が示された。

今大会では、トロイ大学で教鞭を取るパキアネイサン・チェラドライ氏（Packianathan Chelladurai）の EASM Chelladurai Award のセレモニーが行われた。チェラドライ氏は、約 30 年に渡り、スポーツマネジメント研究の第一人者として世界をリードしてきた。1985 年に初めてスポーツマネジメントを著書として体系的にまとめた“Sport Management: Macro Perspectives”は、多くの大学の教科書として使用され、これまでスポーツマネジメントに関連する著書を 10 本、学術論文を 100 本以上執筆するなど、スポーツマネジメント分野の研究に貢献してきた。研究者としての功績もさることながら、教育者として多くの学生を指導してきており、これまでチーフアドバイザーとして 39 名の博士号取得者を世に送り出すなど、人材育成にも力を注いだ。その中には、小笠原悦子氏（順天堂大学）、松岡宏高氏（早稲田大学）も含まれる。“チェラ”の愛称で親しまれるチェラドライ氏

は、誰からも愛される人柄と強いリーダーシップを持っており、彼を慕う多くの学生がスポーツマネジメント研究を志したのは言うまでもない。こうしたチェラドライ氏のこれまでの功績が認められ、今回 EASM Chelladurai Award と題し、新たな賞が設けられた。今後 EASM Chelladurai Award は、10 年以上に渡りスポーツマネジメントの教育、研究などに貢献した会員を表彰する。本セレモニーでは、チェラドライ氏が約一時間に渡り、自身が歩んできた研究者、教育者人生をユーモアたっぷりに熱弁され、ヨーロッパ・スポーツマネジメント学会の更なる研究の発展を最後のメッセージとして残された。

3. 研究発表

一般研究と EASM が設定したテーマに沿った内容を発表するワークショップの研究発表が、例年と同様に行われた。今年度は、一般研究ならびにワークショップの総発表数は 244 題であった(表 1)。2014 年は 245 題で、ほぼ同程度の発表数となった(小川・庄子, 2015)。表 1 には、国別の演題数を示している。ただし、当日の発表者の国別数となっていることに留意していただきたい。今年度は、アメリカの発表者が最も多く、次いで、イギリス、ドイツとなった。また、オランダまでの上位 7 各国は、昨年度と同様の国が揃っている。

一般研究は、口頭発表とポスター発表に分類される。表 2 には、口頭発表の研究分野別の演題数と占有率を示している。今年度は、全 19 分野の口頭発表が行われた。最も多い研究分野は“スポーツ政策研究 (Sport Policy)”であり、次いで“リーダーシップ研究 (Leadership in Sport)”、“スポーツ参加研究 (Sports Participation)”であった。昨年度、スポーツ政策研究に分類された研究は 9 題であったのに対し、今年度は 20 題と大幅に増加した。また、リーダーシップ研究とスポーツ参加研究も同様に、昨年度それぞれ 9 題、12 題だったものが、今年度は 17 題、16 題と増加傾向にある。

表 3 には、ワークショップにおける研究分野別の演題数および占有率について示している。今年度は“Impacts and Outcomes of Sport Events: Streamlining Measuring Tools (スポーツイベントの効果とアウトカム：測定ツールの合理化)”のテーマについて最も多くの発表が行われた。今大会のテーマである“Sport Management in the Digital Age (デジタル時代におけるスポーツマネジメント)”に関わる“Digital Sports Events: The UEFA Euro 2020 (デジタルスポーツイベント：UEFA 欧州選手権 2020)”や“Mobile Applications in Recreational Sports (レクリエーションスポーツにお

表 1 国別の演題数集計

国名	演題数	占有率
アメリカ	52	21.3%
イギリス	34	13.9%
ドイツ	24	9.8%
オーストラリア	16	6.6%
ノルウェー	14	5.7%
カナダ	11	4.5%
オランダ	11	4.5%
ベルギー	10	4.1%
日本	8	3.3%
フランス	7	2.9%
中国	6	2.5%
デンマーク	5	2.0%
ポルトガル	5	2.0%
ニュージーランド	5	2.0%
スペイン	4	1.6%
フィンランド	4	1.6%
アイルランド	4	1.6%
スイス	4	1.6%
トルコ	3	1.2%
イタリア	3	1.2%
ブラジル	2	0.8%
ギリシャ	2	0.8%
オーストリア	2	0.8%
ハンガリー	2	0.8%
リトアニア	1	0.4%
スウェーデン	1	0.4%
キプロス	1	0.4%
タイ	1	0.4%
ブルネイ	1	0.4%
チェコ	1	0.4%
合計	244	100.0%

表2 一般研究における研究分野別の演題数および占有率

一般研究	演題数	占有率
Sport Policy	20	10.9%
Leadership in Sport	17	9.3%
Sports Participation	16	8.7%
Governance of Sport(s) and Sport Organisations	15	8.2%
Marketing In and Through Sport	15	8.2%
Sport Fans	14	7.7%
Social Media and Digital Sport Marketing	11	6.0%
Global Sporting Events	11	6.0%
Sports Economics and Finance	10	5.5%
Other Sport Management Issues	10	5.5%
Critical Sports Management Issues	8	4.4%
Sport for Good	8	4.4%
Tourism and Leisure Sport Management	7	3.8%
Online Fan Engagement	5	2.7%
Online and Blended Teaching and Learning	5	2.7%
Opportunities, Challenges and Trends in Sport Management	4	2.2%
Sporting Events, Online Media and Digital Legacies	3	1.6%
SPECIAL SESSIONS	2	1.1%
Teaching and Learning in Sports Management	2	1.1%
合計	183	100.0%

表3 ワークショップにおける研究分野別の演題数および占有率

ワークショップ	演題数	占有率
Impacts and Outcomes of Sport Events: Streamlining Measuring Tools	9	18.4%
Exploring and Mapping Higher Education in Sport Management in Europe	8	16.3%
Corporate Social Responsibility Communication in Sport	5	10.2%
Mobile Applications in Recreational Sports	5	10.2%
The Business and Management of Sport in the MENA Region	4	8.2%
Corruption in Sport: ESMQ Special Issue	4	8.2%
Digital Sports Events: The UEFA Euro 2020	3	6.1%
Ambush Marketing and Sport Sponsorship	3	6.1%
Organisational Diversity in Elite Sport Practices	2	4.1%
Sustainable Management of Sport Facilities	2	4.1%
Gamification in Sports Management	2	4.1%
Austerity I Sport: ESQM Special Issue	2	4.1%
合計	49	100.0%

けるモバイルアプリケーション)”についてのワークショップも設けられた。ワークショップの合計演題数は、昨年度が76題であったのに対し、今年度は49題と大幅に減少した。

表4には、日本からの発表者について示している。口頭発表者とポスター発表者を合計すると、8名の研究者が発表を行った。口頭発表は新井彬子氏（早稲田大学）、伊藤真紀氏（順天堂大学）、東原文郎氏（札幌大学）、舟橋弘晃（早稲田大学）、山口志郎氏（流通科学大学）の5名であった。ポスター発表は石井信輝氏（摂南大学）、出口順子氏（東海学園大学）、中正樹氏（静岡大学）の3名であった。石井信輝氏（摂南大学）、舟橋弘晃氏（早稲田大学）、山口志郎氏（流通科学大学）については、2大会連続発表を行っている。

表 4 日本からの発表者と発表タイトル

発表タイトル	発表者（敬称略）
Career Decision-Making Process of Japanese Olympians: Factors influencing Female Olympians to be Elite Coaches	早稲田大学 新井彬子
Risk Management during Sport Activities: Japanese Sports Legislation and Precedents (ポスター発表)	摂南大学 石井信輝
A Comparison of Japanese and American Students' Sport-Related Mobile Application	順天堂大学 伊藤真紀
Profiling Members of a Supporters' Club: A Case Study of the V. Premier league in Japan (ポスター発表)	東海学園大学 出口順子
Institutional Environment Influencing the Establishment of Sport Commissions in Small and medium Sized Municipalities: A Comparison between Japan and the Florida State	札幌大学 束原文郎
A Quantitative and Qualitative Analysis of Japanese Television News Coverage during the London Olympics Period: A comparison with the Beijing Olympic Period (ポスター発表)	静岡大学 中正樹
The Construct of the Outcome of Elite Sport Success: Development of Perceived Personal and Social Benefits Scale	早稲田大学 舟橋弘晃
Evaluating the Perceived Social Impacts of Non-Mega Sport Events: Comparisons of Local Resident's Pre- and Post-Event Perception	流通科学大学 山口志郎

3. 1. イベント効果研究について

イベント効果研究の分野は、ワークショップの演題数として最も発表数の多い研究分野となった。昨年度の学会テーマは“Social and Commercial Impact of Sport（スポーツの社会的・商業的效果）”であり、またヨーロッパ・スポーツマネジメント学会が発刊するジャーナル European Sport Management Quarterly でも、2015 年第 15 巻第 1 号において“Impacts and strategic outcomes from non-mega sport events for local communities（ローカルコミュニティのためのノン・メガスポーツイベントの効果と戦略的アウトカム）”と題し、特集号が組まれた。ヨーロッパ・スポーツマネジメント学会では、2012 年ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会の開催を契機に、スポーツイベントの大小に関わらず、イベント効果の研究が積極的に進められている印象を受けた。

本ワークショップの目的は、スポーツイベントの異なるタイプのアウトカムと効果を測定する尺度を精製するプロセスを議論することであった。本ワークショップの召集者で、Journal of Sport & Tourism のエディターでもあるマイク・ウィード氏（Mike Weed）から本ワークショップを開催した経緯や背景が述べられ、その後 9 名のプレゼンターによって本テーマに関連する研究発表がなされた。特に興味深い研究発表だったのが、本ワークショップの発起人兼召集者であるマレイケ・タクス氏（Marijke Taks）の“Construct Validity of Social Impact Scale for Sport Events（スポーツイベントのための社会的効果尺度の構成概念妥当性）”であった。本発表では、カナダで開催されたオンタリオサマーゲームに対する地域住民の影響を 2 つの異なる社会的効果尺度を用いて検証を行った。2 つの異なる測定尺度の共通項目から、(1) 心地良さと社会的結合、(2) ソーシャル・キャピタル、(3) 対立と乱雑、から構成される 13 項目がノン・メガスポーツイベントの社会的効果を測定するうえで適切だと結論付けられた。

著者も本ワークショップの発表者として、登壇した。タイトルは“Evaluating the Perceived Social Impacts of Non-Mega Sport Events: Comparisons of Local Resident's Pre- and Post-Event Perception（ノン・メガスポーツイベントの社会的効果を評価すること：地域住民のプリ・ポストイベント知覚の比較）”であり、神戸マラソン開催前と開催後で地域住民の社会的効果を含む仮説モデルに変化があったかを検証することであった。フロアからは、仮説モデルの妥当性やプリ・ポストの調査時期に対する

建設的な質問やアドバイスがなされ、大変有意義な発表となった。

本ワークショップの最後にディスカッションの時間が設けられ、ウィード氏、タクス氏、そしてもう一名の召集者であるライアン・スネルグロブ氏 (Ryan Snelgrove) から、「イベント効果を評価するためのアプローチとテクニック」と題し、統括が行われた。オリンピック・レガシー・キューブと似た概念モデルを用いて、ポジティブ、ネガティブ、そして偶発的に発生するイベント効果を測定するために、どういったアプローチ方法で測定すべきか議論がなされた。これまでスポーツイベントの効果を測定する手法は様々であり、研究者の学問的バックグラウンド (スポーツマネジメント、スポーツ社会学など) や社会調査法の違い (量的・質的調査) によって、統一した見解がなされていなかった。このことから、本ワークショップを通し、今後のイベント効果研究の道筋が定まった印象を受けた。

3. 2. スポーツ政策研究について

スポーツ政策研究の分野は、上述の通り、第23回 EASM Conference において最も発表数の多い研究分野となった。本分野では、自治体の政策やスポーツシステムに関わる研究、競技団体の研究、地域スポーツクラブ、スポーツツーリズムに関する研究など、様々な対象をテーマに発表が行われたが、特にエリートスポーツに関わる研究が活発である印象を受けた。

本分野ではエリートスポーツ研究で知られる、サイモン・シブリ氏 (Simon Shibli) やヴィエラ・デ・ボスチャー (Veerle De Bosscher) の一般発表が行われた。昨年度、基調講演にて登壇したシブリ氏を中心とする研究グループは、“Winning Streaks: A Proxy for Effective Elite Sport Policies? (連勝：効果的なエリートスポーツ政策の代理とは?)” と題する研究を発表した。オリンピックにおける各国のメダル獲得数は上下変動があり、継続的に向上させることは稀であるとされている。一定期間継続的にメダル獲得数を向上していることを“Winning Streaks (連勝)” と定義し、“Winning Streaks (連勝)” と各国のメダル獲得に向けた政策との関連性について、興味深い研究発表がなされた。

SPLISS (Sports Policy Factors Leading to International Sporting Success) 研究の中心人物であるデ・ボスチャー氏を中心とする研究グループは、SPLISS モデルに基づき 15 ヶ国のスポーツ政策を国際比較した研究を発表した。本研究は、58 の研究者と 33 の政策立案に携わる人物との大規模な研究プロジェクトとして行われたものであった。スポーツ政策の成功に影響を与える、9 つの“pillars (柱) ”、つまり政策的要因の得点を算出した結果、オリンピックにおいて、より良い成果をあげている国は全体的な得点が比較的高く、いくつかの“pillars (柱)” に強みを有している国が効果的なメダル獲得を行っている と発表した。

一方で、その SPLISS モデルを批判的に検証した研究を発表したのは、イアン・ヘンリー氏 (Ian Henry) であった。ヘンリー氏は、上述した SPLISS モデルを批判的に検証した結果、(1) 存在論や認識論の立場から見た因果変数の問題、(2) メダル獲得数やメダルの市場占有率といった変数の内部妥当性、(3) 各国の経済的システムやスポーツ関連予算などを比較することの信頼性、(4) 9 つの“pillars (柱)” には不明瞭な部分が存在すること、(5) 多変量統計解析を行うことの問題点といった、計 5 つの課題を指摘した。上述した 3 人の発表者は、同セッションでの発表であったため、非常に有意義なディスカッションが行われていた。

3. 3. スポーツ参加者について

スポーツ参加研究は、昨年度から発表演題数が増加した研究分野のうちの一つである。今年度は、ランニングイベントに着目したセッションが設けられており、世界的なランニングブームを感じさ

せた。

コンスタンティノス・コロニオス氏 (Konstantinos Koronios) ほか、ギリシャの研究グループは、“Factors Influencing Future Marathon Running Participation (将来的なマラソン参加に影響を与える要因)” というテーマで、ハーフマラソンへのコミットメントと関連する要因の検討を行った。具体的には、対象者の最近のマラソンへの関与と、社会化の機会、健康とメンタルヘルスに対する認知、性別による動機の違いによる潜在的な個人の影響の関連性を検証していた。

アメリカのナンシー・ラフ氏 (Nancy Lough) を中心とする研究グループは、ロードレースへの参加者が抱く動機づけを、社会的認知理論を用いて研究を行った。本研究グループは “Bolder Boulder” という団体が主催するランニングイベントの取組に着目し分析を行った。“Bolder Boulder” が主催するランニングイベントでは、“I am Bolder” (私は大胆) というキャッチコピーのもと Facebook 特設ページを開設しており、参加者が大会にまつわる自身の経験や動機をアップロードできるようにしていた。本研究グループは、質的研究方法を用いて、“I am Bolder” の Facebook 特設ページにアップロードされたビデオやテキストを分析するというユニークな研究発表であった。

トルコのジェル・シューメーカー氏 (Jelle Schoemaker) は、ランニングイベント参加に対するロイヤリティについて、ランニングイベントにおけるサービスの視点から研究を行った。イベントの革新性とイベントに観客がいることがロイヤリティを規定する要因であることを示し、今後の研究課題として、どんな革新性と観客がロイヤリティを高めるのかについての質的研究が求められると述べていた。

本セッションの発表者とフロア内で様々な議論が行われた。例えば、シューメーカー氏の研究は「スポーツ参加者」の研究なのか、もしくは「イベント」の研究なのか不明瞭であった点が指摘され、研究分野を考える上で貴重な意見であった。また、アメリカのラフ氏らが対象とした “Bolder Boulder” のイベントが特徴的なイベントであったことから、他のイベントにも当てはまるのかどうか、一般化の可能性について議論がなされた。

4. まとめ

以上、第 23 回 EASM Conference における基調講演、セレモニー、研究発表について略説した。基調講演においては、親学問の手法や理論を用いたスポーツマネジメント研究の重要性が指摘された。セレモニーでは、チェラドライ氏からスポーツマネジメント研究の更なる発展を望む強いメッセージが述べられた。研究発表においては、イベント効果研究、スポーツ政策研究、およびスポーツ参加者研究をクローズアップし、分野別の傾向や研究内容を報告した。ヨーロッパ・スポーツマネジメント学会の研究は、北米スポーツマネジメント学会と比べ、実践的な研究や政策的な研究に重きが置かれ、現場での危機感、問題意識を研究としてどう落とし込むか活発に議論が行われていた。一方で、基調講演での問題提議にもあったように、理論と実践の乖離や過去の学会報告でもなされた、「実践面にウエイトが置かれているため、仮説検証という科学的手続きにより議論の不足」(舟橋ほか, 2012) など、学会としての問題点も垣間見えた。今後は、現場での問題解決を図るために親学問の理論を援用し、エビデンスを明確に示した実践的な研究が進むことを期待したい。

なお次回大会は、2016 年 9 月 7 日から 10 日にかけて “Memories and identities in sport management in Europe(ヨーロッパにおけるスポーツマネジメントの記憶とアイデンティティ)” をテーマに、ポーランドのワルシャワで開催される。本レポートがスポーツマネジメント研究の発展に寄与する一資料になれば幸いである。

写真1 クローク公園にて、日本からの参加者と

【謝辞】

第1 著者（山口志郎・流通科学大学）の本学会大会への参加並びに発表に関する費用は、平成27年度流通科学大学海外学会発表助成を受けている。ここに感謝の意を表したい。

【文献】

- Bosscher, V. D., Shibli, S., Westerbeek, H., and van Bottenburg, M. (2015) Do Sport Systems Matter? An International Comparison of Elite Sport Policies in 15 Nations (SPLISS). 20 minute-oral presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.
- 舟橋弘晃・住田健・東原文郎（2013）ヨーロッパ・スポーツマネジメント学会2012年度大会．スポーツマネジメント研究，5（1），59 - 65.
- Ian H., and Ko, L. M. (2015) Unpacking the Spliss Case for Identifying the Critical Success Factors in Elite Sports Systems: A Critique. 20 minute-oral presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.
- Konstantinos K., Athanasios K., Zervoulakos P., Leivaditi E., and van Psiloutsikou M. (2015) Factors Influencing Future Marathon Running Participation. 20 minute-oral presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.
- Lough, N., Pharr, J., and Eagleman, A. N. (2015) I am Bolder: An Examination of Motivations for Road Race Participation. 20 minute-oral presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.
- 小川祥加・庄子博人（2015）ヨーロッパ・スポーツマネジメント学会2014年度大会．スポーツマネジメント研究，7（1），51 - 57.
- Schoemaker, J., and Tinaz, C. (2015) Loyalty in Running Events Participation. 20 minute-oral presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.
- Shibli, S., Bosscher, V. D., van Psiloutsikou M., and Westerbeek, H. (2015) Winning Streaks: A Proxy for Effective Elite Sport Policies? 20 minute-oral presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.
- Taks, M., Littlejohn, M., Wood, L., and Snelgrove, R. (2015). Construct Validity of Social Impact Scale for Sport Events. Workshop presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.
- Yamaguchi, S., Yamaguchi, Y., and Nogawa, H. (2015) Evaluating the Perceived Social Impacts of Non-Mega Sport Events: Comparisons of Local Resident's Pre- and Post-Event Perception. Workshop presentation at the 23rd European Association for Sport Management Conference, Dublin, Ireland.